

門
特
1833
卷



同
緑

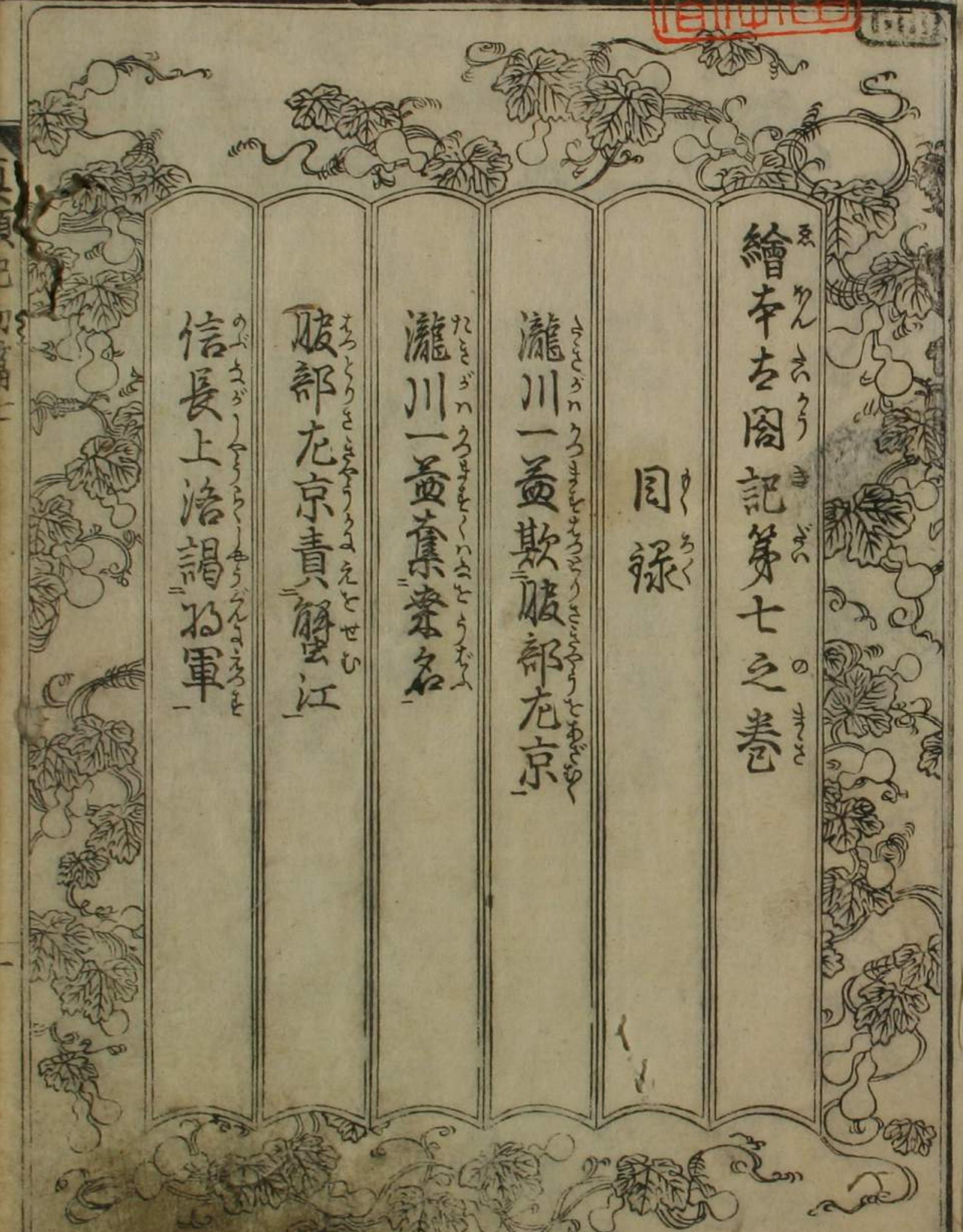
繪本左圖記第七之卷

瀧川一益欺服部在京

瀧川一益集卷名

服部在京責解江

信長上洛謁乃軍



繪本古文圖記卷之七

瀧川

一益歎服部在京

客ありね後へく各其志とくもをのべて揚州の刺史
んゆを殺し武の貰財多くんゆを殺すい武の
多くとくんゆを殺す其一人の日腰よ十万貫を纏ひ
に縛て揚州よりんと三つの者と並んと欲とそ皆其志と
云へるから應仁の法より歴代お後へる兵れりそ天下と
きゆの麻のびくくふを立殺すうふとことあり君のあ
ふと殺とあり自立して君所弑しきりあり匹馬ようじて
天下よ喝あり名家の子弟卑紳と零落せりあり英雄
豪傑盡し既り天下交へじて庸の心すむほしとぞ

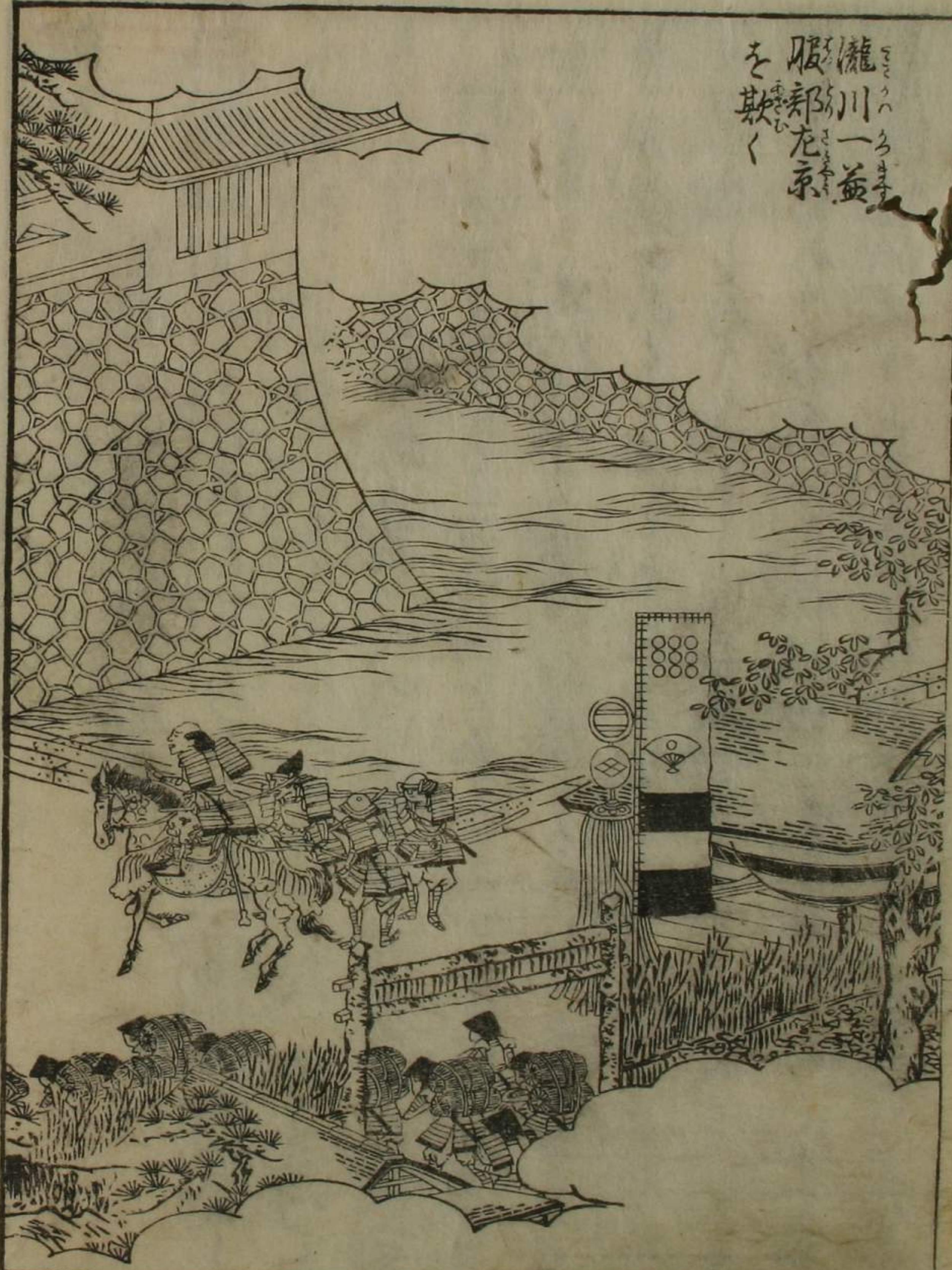
佐久間信盛築洲販岩

若吉郎再築洲販岩

小六黨戰及濃勢

洲販岩滅一夜

竹中重治洲販移居



一雄の士悉く君代撰とてはある名審までみゆきて拂へ全
と死きとも死きする世の法まゝきの海患の士稀にて今宵
西園よほよしも明日の東園よ遙か喰し朝より君臣の曉び
源よしり夕に歎國のねじゆうらと弓地を幸く死せのへ
心虎狼よしも甚く寔よ洞窟て本の波宮瀧川左近益
とく豪傑あつ勇ひ首をゑゆ袋の物とゑよ仰て智ひゆ
を候ひて敵場を隔てひ去承徳のそぞら浪人て國と
武者被ひ終え尾衣み走り不破河内守柴田勝家を蒙
てお害す不破紫田を屢々薦を吹捧信長よ往るも
んととども功をして禄を喰んず奉多にあくびこそ
放て洒ひしが密よ信長卿の奸情をくふふ太度を大む

寔よ奥業の君なし心を傾けぬ身よりゆらの功を立べ
とて信長卿(斗築)を歎ぐる業名聲にて勢刃小箇を押ゆ
るゝとて信長甚恠び三る余騎の還兵をれて瀧川よ附屬
せんと下知し終て左近毛を止め矣と曰業名の勢別尾別
の咽喉よあって庸劣の地よばば豈草勢の合戦とて容易に
可得なりを深んや某單騎にて彼而て詭き斗略を立て
集ぐべ其財若軍勢と出力と力を助け終べと約束
只一人武者絶縁の絶縁又生立勢別にて詭きたり寔よ勢
別長崎の場を脅部たる友寔とてる者あり瀧川左近と
同母のよしありかよ左近毛長崎よありたるゑよ對面
兵よ別々の安危を向ひ詭語頗細たり時よ左近て



云是下先年に召を去て後久しく在ありを知りば今何雪
安房せぐる龜川言て曰某佐木本の家不外く此者船引
を以て东國を悉くゆうそよう中國に西國へ旅人をす
尤ふえよう一益が其智勇略を知れば寔よ止めて供ふ半
纏を以てんと一益其父を憶てきて云ひ某生浮弱とを
助け縫きと凌ぐ齒内东國よりいと圓剛よ乃勇たるは尾
張の小国信長よりいと豪傑の士元を助け今川が大軍と
碰き義元を折破竹の勢をして勢例を討んとて勢例
を討ふ先長確を以てとぞ信長大軍とて齒内に至
り是下信長を妨ぐべき極ありや我竊よ是下のるよ乞
を愁て尤近き所をよと云我もかく小國の強敵を憲ふ

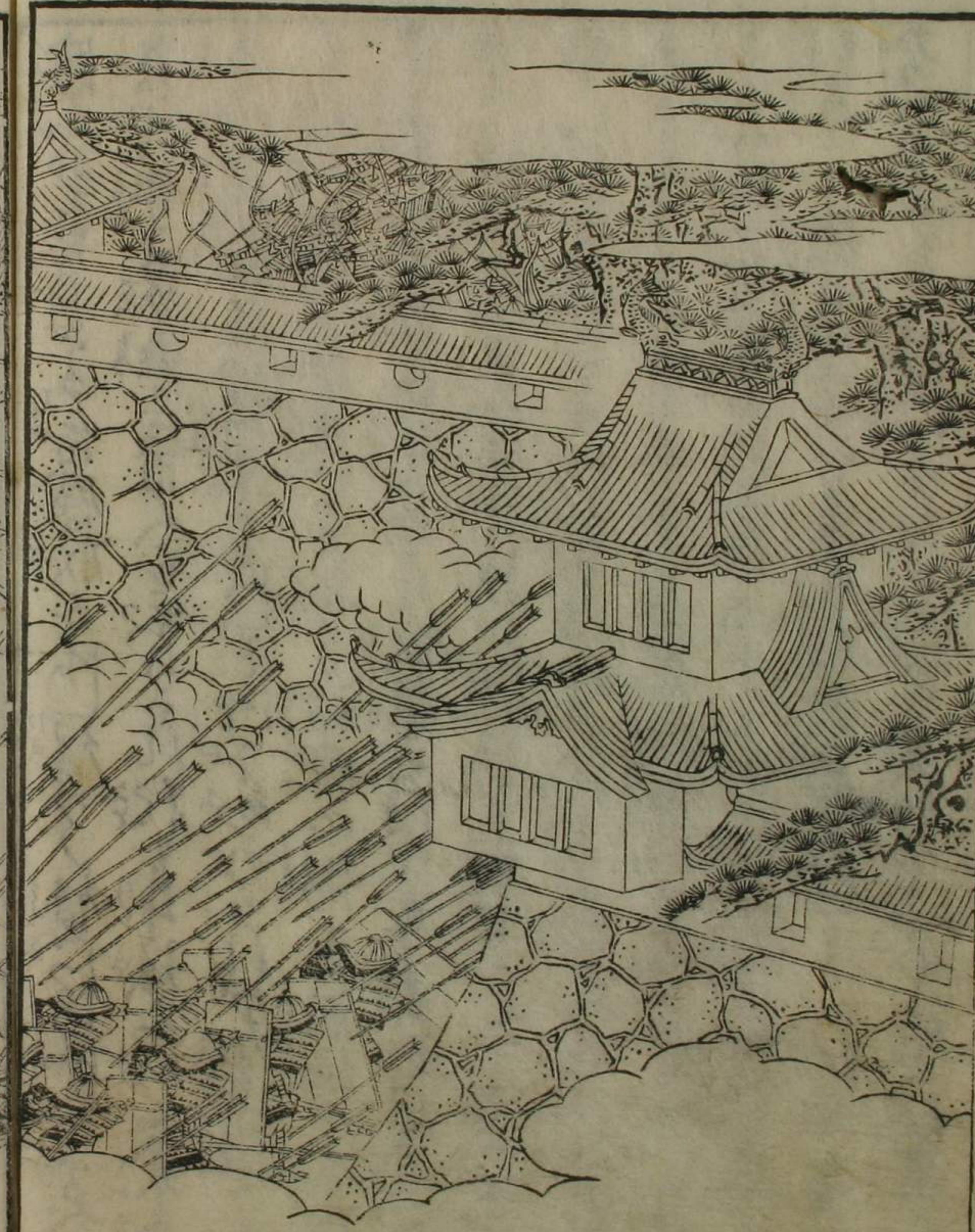
ゆゆり是下計あらばあら強とも一益斗たれとを以て
信長を防ぐ所の難きりやくもや尾張の地盤ゆゑて
守りと長確を攻め候ひ蟹江より敵ひ蟹江を攻め付る
長確より助けまよお敵ひと長確の勢を張りむ蟹江の
勢を是ゆりにて近村をもを働くが事と積で尾張の地を
畠し信長を討んと難きいわゞ且復つゝ城に築
斗あり是下え素本初寺のと人と若し信長を攻め
門徒の法歎と惡ひ不なしゆを石山のと人よ告げ金銀
兵糧を石山と備べて累とて叫びかねとじ等間に旨
を清せし悔るも並みほしたる大にうちび石山(後)

を三委細を取きしれど一益が先刀より遅はず全般無難
あくまでも調ひ一益をみて蟹の城瓦礫うへて外籠縛
ノリ信長を討ひ落りて塔をもてて落と強み軒をけよ
一益止すちよん侍よりては終よ教えの人まとて蟹の
立つて城の纏強十からず其とともほび築されば月
そく能能へ武家玉手石の敷惠へ運び入と一益を大
ねうて又百余入龜城せら今ハ防禦のゆへ金と收ぶ

幸限

龜川一益集業名

龜川を近一益の腹郊を欺き蟹の城を築せ密使
を以て信長卿へ云としれど信長大よ恆じ援群の斗賭
感んずるゝぞ有感狀を仰揚りて蟹の城主と云
朱印并み宣率三百人をせんとおも斗賭をみて業名
立得べり業名の城主とぞしと御下勤みられがた近限
く恆じ近々の城武士を折と防禦の術を潤練一十倍
の大軍をも防ぎ歎び乍ら形勢之向に年暮正月業名
の内河内より兵士三千名を率て蟹の城主を望せんとて幽州の居
スうもろゝのゆそそ業名の城を虚のよう若くしうを
さらば抑あ業名城業名へとて左近自ら教百騎を
立率へ鐵馬に方を立てて急攻すが如くが城を折り
あくまでも沙汰をも術を失ひかくのぐれ居矣



う一益心保て城下集ひ奉丸又て徳勢三郎が妻を
をす捕一回ちるをあへて番兵を守てよく廻りで巖器
御門を守り弓矢もびらてわへうる徳勢三郎へか教づの
みとももあらじ其望日大内ようゆう走り場へと
とうふを擣くよう弓強砲を打ち面を向くべさ
やうぞほこいふと惆悵をそむとして立たうる瀧川
一益失念のよて放れ出大奇うそてやうるの海を匠まよく
承り我の教子の兵士を以て天下を武者被ひも英雄
なり今此地よ背く足を向んとそしも教子の兵士を
とべき元はかく汝をあらわ我居場とさせ一回岩前
うくく心浮ひ我之化圓へ詰くそむき城より海よりま

西カタマリ難く思ひ妻子をひはと何方カタマリも旅くじと城戸
を用ひ妻よ一族蕃代の局ト不法出カタマリキテクレ徳勢
三郎あまうれすに云々妻も出ど才を憐で母れど何ん
とよどもそのたゞまで軍を記く徳慶よると妻
子を引定しとびくと大内カタマリと詔きうるそようを近も
奈名カタマリを立城カタマリ一瀧川カタマリ徳吉支治義をて築にとま
らせ信長卿カタマリ此旨進よ及びしが信長方に感ド爲ひ
又々奈名の城カタマリより令せられ新カタマリよ五百疋の兵を賜ひ
乞カタマリとからて徳勢にと奈名の要害城守せ終て瀧川一益
故て奈名城の住民を没せ先の城主徳勢三郎が主に守
政道カタマリえり民と構え室羅を立し課役を免へ専ら

仁政を布施し、乞ひ奉名蟹の百姓町人候るを限り
極も餘勢三郎奉名蟹逃出され放く大河内の城にまじ
えうくのほ言とて及び軍勢をや至城を攻めし者
皆河内守が圍立候も下を老の臣下にて難き先もの
なれど間者を走しゆの対面を成し候りせらるふやがて間
者立久り奉名蟹集へ大ねの龍川を遁とつ浪人長崎
の腹邪丸系と斗て先鋒はよ城を築今又奉名と集ひ
一十九日も乞ひ先の城を改め課役と逸
賞罪を犯し民を擅用もとより親の五代坐もろがむと
あれよし奉名の百姓聞人延喜の宣代堺衆の源代之
とて怪び勇じゆ大方ナリに堪能の百姓も奉名を奉事
未だ而もとさう小服する甚一毛を立て考るよ山祇蟹武

士の鄰又あに今軍兵をみて攻撃す終びの百姓の
おもくの腹せうごり空易々急伏見奉ちとよく恩
急みて施せしとやうに國守より兵を教へ罪を
縁せられうる奉名蟹もやうに長崎の腹邪丸系と
恩心とく蟹江よ城を築く奉名蟹を奉り其謂
ありや否やと犯し奉名蟹より兵を教へ罪を
且すと奉名蟹も國守よう假者成立其意欲を以て國守
の幕下もあくひゆのをば眾を充して奉名蟹を守らと
云々其處に先の城主の不仁不智を惡く百姓町人今
城主よゆ腹ヌとて体勢三郎よ罪もて今の龍川とや

らるゝ四詩の其と國をよみておやう付へ尾州の押へ竟
の勇士をうり急ぎ孝名長慶復讐者を主とすあつじと
衆は乞ふ一役其の日ほ義を果にす

肢鄰左系政解密江

去植へ、圍守の役者衆名をもつて、瀧川一益よ對面へ
圍守よりや、鉾と鎧を演舌し、其の次すへお専勢刑の
圍守よ、植居せらる者一隊の主より、百姓町人よ、と皆
圍守の令し酒ひ、うりのいは、施るよ、海達威を震ひ、當城と
龍巣ひ、兵殺多の不敵を、集ふる其罪、脛きくあらずに、軍兵
を犯し、急よ、征伐せらるゝき、不以ゆく、百姓を教育して
政ひ、又邪うきは、を、ま寃、仁立候の圍守、互に、征伐せん
も、かえり、圍守の幕下よ、属し、守圍破敵の業と、抜けば、其の
侵み、衆名死於、尚功すも、さざひ、懸賞す、一、或ハ、盜心と改
めど、圍守の令よ、應せどんが、忽軍兵を、れて、誅殺し、城破
若し、粉の如く、且、眾を、死とぞ、と、敵よ、演され、瀧川充辺
あり、笑ひ、汝等をも、びらて、我言死よく、ばべ、お我を行き
く天下よ、撲ひ、不仁妄行の、城を、除し、のみる仁義の君
を、助く、先の城を、併勢す、と、愚昧にて、民を、らぐれまに、愚
政、自ら、増長し、剝へ、戮圍の間よ、捨て、要害の地とも、(之)連
もなく、鈎一タよ、城を失ひ、へ、憲く、彼が、賤弱より、犯し、其
君す、圍守と、て、うるを、愚人を、死とも、不顧、却て、眾と、戰す



向へ何より國司の政道へ一時も我らしく扶助とか
そ勢力を泰山のぼく保くよし、若不仁不義なる財を
経済三郎をひて例ほし、參天兵を手牽へ小富一家と討ば
鶴川一園は我有となり候る。汝又大河内ゆゆ譯ニヤシ
達セよ政石の邪正より軍勢を差向ひと案にお遠の
返善國司の役者多死失ひ改をうへ、扇のてく迎えりぬ相
又長崎の據跋那左京方よりも役者をひて其謂と弱向ひ、鶴
川うちまきへ悉く跋那がおれうもろ不ねありやと事なれ
を左京も鶴川が珍り不心よやうに蟹に素名を合せ外
其上小園方の士卒を引へ防禦の備へをよしはせへけり
却て素名へ役者を主蟹への塔をうどをきはすをいし

角一益吾へ元より蟹津郡の屋久の地をうふよしには
うち小園信長より甚をひて蟹津の城主と浦ざらと國司の
令りひだり不被將く蟹津に反対する間其意心得りと云
うしべ役者大きに發るき急ぎ長崎よりゆうまの次第を語
けひだり京の外よひ天へ我幸新寺ようう令根兵狼を
備至若干の費をつとりだ築くよかうと被滅よ歎き
棄ふじこと安らる御冊役うそひへうでう止んと躍りとつ
く勢ひが無と發して攻討へと先國司の役者よ此報
きひ告てゆしめ直よ三よ余疋を手牽へ蟹津の城
へ押寄に方を困で攻へりくる此報よ鶴川條を主塗西
又百余疋うそて籠すゝ一益うひて小勢力をひて大敵と

防ぐべき處密かうるしが石棚のよ大石一本を積うる
一日よまろたしかけうるしが腰部が左車死腸の者數を知
らしむるもあく掛戸を開きて三百余疋百挺余の箭
矢を一度よどとちりを放ち更細の中より龜波と相
続を一度よどとちりを放ち更細の中より龜波と相
て突きしれん長崎勢討す者麻のぼく右彼左挂よび
至と掛兵ひ敵て進ますうるしそて城に入る腰部左京
元来一益が軍氣已が及ぶるにあくしが圓弓の加勢と
乞くきて攻べと敗軍とて長崎入ゆうるをふ瀧川
感物甚ぞ強く勢ひ遠近に震ひしれん近郷の圓弓本牧
福山上本向瀧川の松の安井小赤り隣ひ素名貞
那のあ郡奉く一益よみゆく今ハ勵難くぞゆくにゆく

信長上洛謁將軍

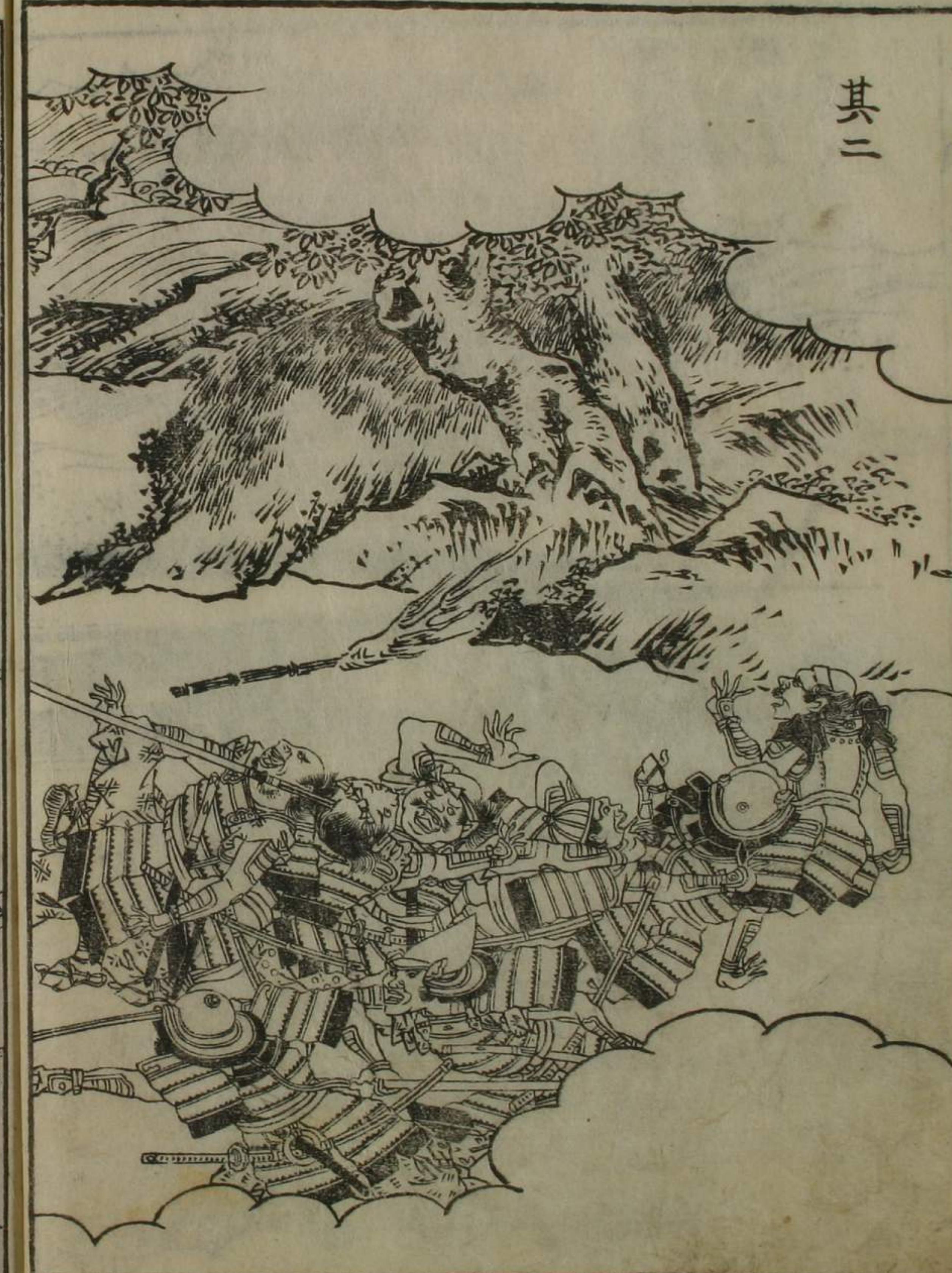
小田信長は瀧川よ勢例を抑へさせ永禄12年八月上洛
てお軍義輝云并よ宮殿三振修理左備長益よ謁一尾
呂一國の守護よ浦でし益よ仁政を以ひト民を愛し
眾を愛し賞を厚く於一後バ國人恨ぐ限りは其
年も著永禄又年莫の下ト信長歎美征伐の主まと
一終よ尾瀧の傍よ洲股の大河ありて進退自由と得
川向ひ筑港の地よ豈よ築き味方の是だまうとあく後
征伐ともふあじと諸臣を立てて欲地よ磐造地と云
者よバ力を厚しめ能くもとし出来の後其の磐をす
まじと一益が急度足りぬバ本下益古例のぼく進



股久
と葉の間田
く岩須佐



其二



生を命を終せんとす時は佐久間信盛本ト又功を奪ひり
ト急々河を駆りて某倉をぬく別院の岩金ノ馬船
ニシテ一とて信長候ひ又の人まを在て二十日の間及
送立とぞ嚴しく命令終を信盛謹で其肩と令義
一退とて風毛残す

佐久間信盛築城記

松も佐久間信盛ハ又の人にまよやかを傍へ小田終ゆ
竹本大切せ築き組で川を浚へ三ふ人をからて敵の丸
坊を防ぐを後を日よ経て急きる故家此よりと安
信長川を源へて紫石が織さ豆溝を掘り戦人とて築
城してハ終す。一息よ跡ちせと松村牛之助長井隼人

田原守一万余人を率ひ一矢中よ押すえぐよ戰ひ
されば佐久間心の猛と勇也ども素因不妙の敵地との矢中
かよば勢の多がもし刃へかど心かくじにも川堀へ押出され水
又觸る者殺をもくじ今ハ防護叶ひかくまよく築き
素て尾州の方へよき方へ反覆方へ多くれ竹本と集め十方
の得付うと候じ勇もえりくら宴よわいと小田家のね紫
田原守佐久間代にて紫石築んど向とく又一人を率ひ
一防護の手配を嚴密に構へ佐久間が敗走するハトおと
精力とて敵を破る此より又く反覆方へ支へられまく討
破て竹本を奪ひとて田根健休中長井と紫石守六千余
兵今度も反討とお晏を定め紫石が陳幕へ押す餘波を

小六黨至
濃勢と
残人



とどどとうとう紫田進て船へるのをかんばりも強がる
敵を矢はめにびきよせうけ並べる大砲をはじめて放つて雨
うちもねちづけちむじひもて弓のうちを邊勢勝つて
又百余騎どりと喰てかけましらぬは勢棄てお遠一にてに途
躋んで近うううう家は日根壁落ちの松材牛之助あい川
のと下より身ひき本田が物の後とう思ひもよび政うう
を紫田方主と見えた善清方の人まだも秋葉の夜討ひよ
ちく勝家が身をもとにほど我さなよと逃出／右往左往
しきりうう紫田方に歸り槍兵接て対戦されと味方死れ死
熱筋ことゆきなしへ今ひそまでとう討死と因ひ定め一里も引
じて城へたる後勢を負死人數をもじびされども大勢勝家

を討ねんと追え来て戮へり小田方のね森辻二千余人
こそ川と隨てかしげ新をみて紫田を敗ひられゆ
れて川を渡り人馬をまどわううう

小六 奪城後濃勢

佐久間紫田の兩ね側股の岩絶造ともすの石壁多くの人ま
を換ド竹木と生ひしれど信長更に夷船ひず却て勞を厭
たまひ後吉即ち石として海側股の岩絶く造化の功をあ
そきやと易はる只も勢を呑具／側股の岩七日の内よ全く
の竹木を切らん只も勢を呑具／信長其謀計もくんと心隠
然てだべさう云ふに信長其謀計もくんと心隠
後吉が玄蕃に任せ其の脅食せしらば後吉並て其の脅

やあすりとん勝ほ笑み猪田加波田内所姓がまよ令ド第後の國
猪立山と舞山より一候の内よ教多の竹本を別岐川へ切邊
一する人まよ今ドほの小尾張の地うそ林本紫垣萬木強國
よ合せく修り出で小六黨の人まよを川の南を渡る海にて
源さ武太の壇を極せ其もを石て岩の本其もよ築せ真島をもそ
うじ働きなう敵反方へうれみ立あうといかくばつこそ小国勢
の豊石城築を討教して竹本を集めよと日根野今井牧村
うんど教多の勢うそ押多唯一島よ歸教えんと安二安三又
掛里タレハ反吉通て小六黨又計策をふしと並べばさ
まくの裏計とあくまほ勢を唱へ此石城築わらしやを
たうる反法方かくてひ果ドと大軍を遣へ經兵急よ探

三月お吉上へ月中旬のうづかれ織又白面龜を傾くるあく
夫のを乱して源三らが西陣又は城を止め兩の暗ると待居す
反吉郎再築測股此石城

反吉此付諸率又令一此川の邊うそ憲泥おりて兩後の便
ゆえんば合戰難波かうじとて括轎尚とくろ業尚を俄よ作
らしと軍率にそと踏せ背く息をき居うそ元素せ夏月乃
の雨たれれば云散じ風流うそ之平和かうけとは
反吉をかれてとくや進めとくや種とそわし一章よ絲波を
作つて安ニ安三よ切崩と安度勢も絲を合せ槍刀を握
ぬし城とことじども泥古滑うそ近引進退自由うそと
或はたまづそくととび人馬の足並文よ定まし日本下が物

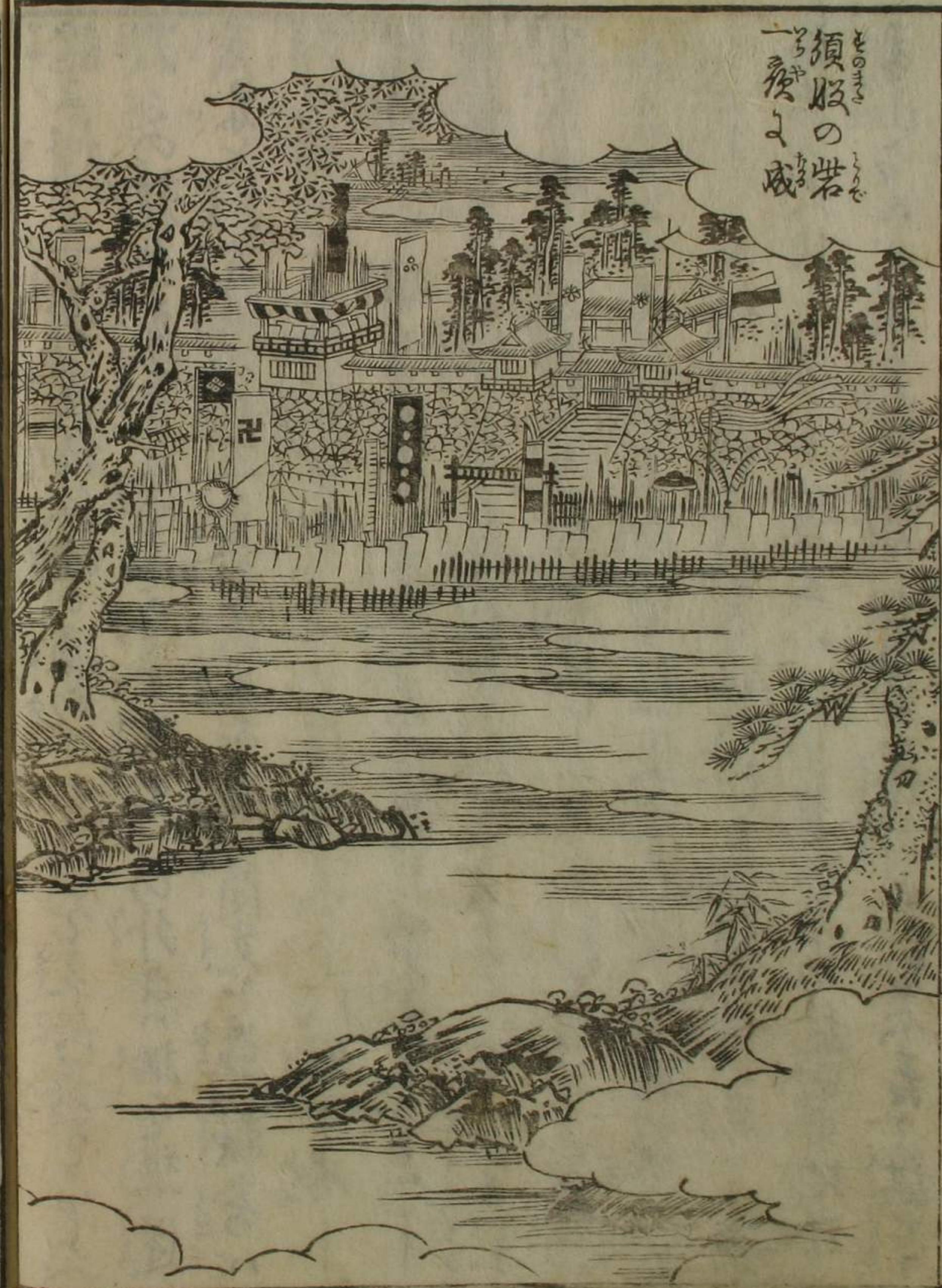
本
下
再び
復讐の
岩を築く



彼捷橋當と履されば泥古ニ泥まど切先を捺へんぐみ切て
血しに反法勢にて伏勢と構へりて謀んば計略無く
此々主よ計策破とテ公軍うそあらうを廟合戰を挑む肉
石垣諸材悉く調ひされば肉の内よ竹木を運び合殺をみて
黄根を組合せ搭籠りともり壁も塀も木板をあて白紙と
ひて毛を張画工よ命令ドキ接間絶対完を画一ウ一夜の内よ
敵の善後全くか耗あらずタレハ兵不備人材の内よ
指揮は立たずベ歎の事もろを約けたり

洲股岩城一夜

龍又似テ一隊の長城忽御と涌出テ旗を立兵姿をうへ
殺みの精兵嚴きニ毛を守マ馬出ノ外よ柵を張達
底本とリ究強の兵三より計矢尾を捺ヘ筒先と並ベ歎あ
討で掛らんと勢い込でかへりテ反法勢太之れ肝を冷
屹地とて醉るがゆく毛風天狗鬼神の不ぬかるべ
廉忽ニ幸て逃と進む毛くらむをさん不全一先引
退き別ニ計略を定め討被りじと軍を立てゆき毛吉
即ち岩の善後全く調ひされば信長大ニ聖懐びれて側臍の謀ノ筋
と云ト一々レバ信長大ニ聖懐びれて側臍の謀ノ筋
爰若大功を称一弟み小六足ノ才加次田端田日以降
高山うんづく勇士皆ノ因見一佐付られ着志が旗奉



よりて益々忠勲を励し、一と令根を出、嘗て一多を
夏吉に始らじと幕下に属する者共を皆く恵び勇氣を

竹中重治移居例服

宇賀馬の城主大沢治郎左衛門の父水良之治郎左衛門の
妻夏龍真不仁を悪く小田の家臣、一人を分至水
をみて義吉よ告へむ後吉主に在び治郎左衛門を謫居

傳ひ信長卿は治郎のトドを云ふに及ぶ信長へと
えんと許容のきよく剣(治郎左衛門)を例服又連うりみる
義吉とべきすちく治郎左衛門を例服又連うりみる
細物修りあ刀を捨ててよ准(計)らん信長卿今日足利
死を賜ゆるも我又足下の死をうるかゆびぞれり

我を討て僕が藤五左衛門を知り終と云治郎左衛門を西
川に隠れにして外の不幸を歎と義吉近く居ちて自信長
を行中すま湯が並替衣幕へ今竹中承後の不道を諷
之閑居にて幸い御子とあり我と足下と大人斗合と
合で竹中をうて味方へ渡しやが信長卿敵て足下を殺じ
候んで用ひ候べ一丈は甚怪んで義吉とちく竹中と從
んと此身竹中すま湯の栗原山の閑室を構へ隠居する
竊よせの活札と観る義吉貌を慶名義源(竹中)が義
よひて一宿候乞ひよと良御共邊を論じ其旨疑甚
細ちうけよ義吉向て曰あは尾列の太守小田信長へと
勇にて大度ありとす我ひて仕んと足下の心へいく

竹中眼を刃ひきを勵へ候猿面の小冠者我並に來
そ續りに近寄はるどりうし我いまと海が面ともうじと
すぐ信長の家臣よ本下義吉即ちる者ありて其面猿の
おもく聰明にて頤軍をよくしとめり本魁より軍謹
兵活易易の論よあらば我を説て信長よ降ししもんととすれ
海果して本下義吉即ちてみやとま義吉完亦とく
巖系の本下義吉と足下王佐の才をひどきを敵
吾爲裁をる義夏よ仕へ割へ金云へ耳よ達ひ良計用及し
去本と曰へく海果るい本大の不引にゆじき人信長是
トの太石義員より腕又久晴へる義夏を捨て明かた
る小田を助け活圓平天下の功を食ふ一遠くに之母の名と

歌へ近き英名死ぬよ及ばず孫をうて承く家業を臣
やんす人の天命をうじや我足下のゐよ此うを説詳よ紫
ノ後と云對大は活節なりも口へまつて共々利害と況
く信長よ力と流儀と美とむ竹中大に歎息して我曾て其
利害不ぞよ非どいんせん小田ハ功業の尋既よ豈して良
固多くそを助く歎夏ハ之國の事歎れし君慕ふて臣倭を
既もんと見みしめ我并くも其食を喰其禄と文く國
隨の財よもく棄て活圓平仕んと乞ふよまの私とどもを
非どや國家をひき我死んと何を改ら論どるをせば義吉即
席をみてれを悉くし莫下の事義教がよじ再び謀を
進むは寔よ某が私を戒め初雅アテ卑微ニ師ム考て是も多



ちり是下奉せゆるはれど此面に居る閑居が別股の邊中と接し
武師又とて教をまし給ひ生氣の本事何ぞう乞ひ如く
歎羨のあはれ因のあはれもばり武師又のあはれと斗て歎羨の子孫を
全ひる紫洞の経とるのあはれに寔よやひて竹中主に腰び信
長(源)計策と歎羨もあはれと歎羨せんむ閑居を別
股(後)止と申す別股の様へよう毛筆を計策こそ竹中
智謀経論の士たゞしが歎羨のあはれ謀略を與ふとび矣度忘武
羅(わら)かじり信長よ仕て助どより歎羨かを見経どんび矣度
を討つ保(や)と極(こ)そめくわ斗ひうる大津活即ちつも竹中
を進む功(こう)にう信長の疑惑と免(まぬが)き小因の幕下とあはれ
か死安堵(あんと)

